明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

12 12

あんげろす

きずな

成瀬 武史

北方領土へ慰問に出かける人も甲子園で力つきた高校生も、ともに一握の土を持ち帰ります。何のために？ 自分とその土地(での経験)を結びつけるよすがとしたいためでしょう。こうして「絆」には人情味がしみ込みます。

人間が自分だけでは生きられないことは、一人では耐え難い痛みにあえば立ち所に分かります。昨年、かなり落ち込んでいたとき、友人が紹介してくれた本に「私たちが苦しむのは(他)人の痛みが分かるようになるためである」と指摘されているのに驚嘆し、心から共感するに至りました。イエス様への私たちの全幅の信頼も、主の十字架の苦しみと私たちの痛みが地続きだからでしょう。秋の陽射しの中で真善美の主との絆を実感できるのを限りなく嬉しく思います。

第 59 号
2012 年 12 月

孤高の説教者

北川一明

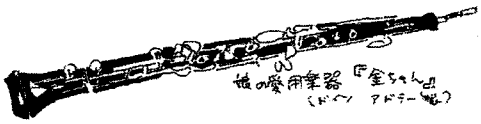
キリスト教研究所より寄稿の依頼があった。二つ返事でOKした後で依頼文を読み、自分の書くべきは《エッセー》と知った。エッセーなる文学類型にはなじみがない。国内線に乗った時に《翼の王国》を読むくらいである。少ない読書経験から推察するに、酒、異性、芸術についてのテキトーな蘊蓄を書いていればエッセーになるらしい。(違っていたら申し訳ない。)《アンゲロス》の性格上、酒や異性よりも芸術について書くのが妥当だろう。

者の愛飲ワイン
(ピション・ラランド)

知り合いのジャズ・サックス奏者が楽器を置いた。将来を期待していただけに残念だった。本人から話を聞いて、むしろ良かったのかもしれないと思い直した。

アルト・サックス奏者だった。自分の中で作り上げたい曲のイメージが次第にテナーに変わって行った。ストイックに完全を追及する彼にとって、テナーに転向するという選択肢はなかった。楽器を変えるとテクニックが追い付かないのだ。そこでアルトでテナー的イメージを表現した。

そうした表現にも新しい可能性はあったかもしれない。しかし自分自身に満足できなかった。プロの芸術家であることをやめ、遊びでテナーを始めた。



妻の愛用楽器『金ちゃん』
(ドイツ アドラー製)

多くの芸術家は完全を目指す。若いうちから完全を目指すことのない者にはひとを感動させる表現は出来ないだろう。完全を目指した者のうちの一部がその道の《大家》になる。

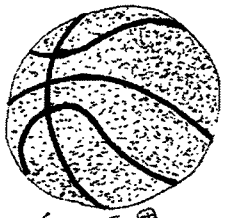
しかし大家になった後でも、人間である以上、完全には至らない。そこである種の「大家」は割り切って、昔の名声で金を稼ぐ。

完全を目指し続ける真面目な大家は、表現を捨てたり、自殺したりする。そうでなくても表現の機会が極端に減る。不完全な自分が表現することに意味を見いだせないのだろう。

完全を目指すのは、多くの場合、自分のためだ。

震災の時、他人のために演奏する人たちがいた。他人のために演奏する場合は、演奏が完全である必要はない。目標は《完全》ではなく、聞き手が慰められることだ。仮に熟達したテクニックが必要だとしても、それは本人の《完成》のためではない。聞き手を慰めるためだ。

若いうちに完全を目指さない者は、モノにならない。しかし歳をとってまで自分のために生きている者は、はたから見ると醜い。本人は惨めだ。自分自身に意味を見いだせないはずだ。「完全な演奏で全世界の名声を手に入れても、自分自身の意味を失っては何の得があろうか」と誰かが言っていたのを思い出した。



息子の愛用
(ノンブランド)

自分のために極限まで表現を追い求める芸術家も、どこかの段階で転換が必要だ。そういう意味で、

彼がいま楽器を置いたのは良かったのかもしれない。

牧師たちは説教勉強会で研鑽を積んでいる。勉強会に参加してみると、みな真面目な人たちだ。《完全な説教》を目指し、般若の形相で学んでいる。

彼らの言葉を借りれば、説教には実存がかかっているのだそうだ。説教批判にも実存がかかっているという。つまり彼らは、同労者の実存を、自身の実存を賭けて批判している。たいへんな努力であり、実に途方もない苦行だ。

血の滲むような努力は、《孤高の名説教》に結実する。

努力が報われることはまことに喜ばしい。ただ残念なのは、出来た説教が《孤高》であることだ。

音楽の場合、孤高の名演奏は聞き手を感動させる。説教の場合、孤高の名説教は聞き手を眠らせる。

《名説教家》という評判が欲しいのなら、彼らの努力を見倣うべきだ。私もそうした評判が、欲しくないわけではないが…。

きたがわ・かずあき(学院牧師・協力研究員)

地震・明学・ボランティア

佐藤飛文

1923年9月1日、マグニチュード7.9の大地震が関東を襲った。死者・行方不明者が十万人を超える大混乱の中、「朝鮮人が暴動を起こそうとしている」「井戸に毒薬を投げ込んだ」といった流言が広がり、在郷軍人や自警団、軍隊、警察によって「朝鮮人狩り」が始まり、数千人の朝鮮人と数百人の中国人が虐殺された。

その頃、明治学院では高等学部2年の金学祐と金宗治が都留仙二教授に保護を求め、中山昌樹教授が2人を匿った。この噂を耳にした在郷軍人（中学部体操教師）が、2人の引き渡しを要求した時、都留仙二は「君の行動は神の御心に反している」として引き渡しを拒否したという（明治学院90年史より）。

関東大震災当時、明治学院は夏休み中で、朝鮮人留学生の大半は帰省中だった。震災後の流言飛語で朝鮮人同胞が虐殺されているというニュースを耳にして、留学生たちは、東京に戻るかどうか、葛藤していたことだろう。高等学部1年だった尹仁駒（神学者・教育者）は当時のことを次のように回想している。

「在日本朝鮮基督教青年会の金洛泳幹事が私たちの家に泊まりながら、帰京する留学生と同僚たちを迎えていた。私はこの知らせを聞いて十月に東京へ帰った。東京は無残に灰の山と化していた。しかし学校と寄宿舎は無事だった。地震の影響は色々な面で続いていたが、学業は平常へと戻った。ここで特記したいのは、賀川豊彦氏が東京へ出てきて避難民救済事業を実践しようと呼びかけ、私たち学生もその事業を手伝ったことである。その活動は数ヶ月継続された。そして冬になり、

寒さをしのぐために火を起こして食料を配給し、子ども達を集めて主日学校を開いたことなどが今も記憶に残っている。灰と化した本所区、深川区、復旧工事と白骨の山と化したその当時の風景は今も忘れることができない。あの時の奉仕活動こそがキリスト教の本分だとわかった。」

震災後、明治学院の学生たちは、賀川豊彦と共に炊き出しや物資配布をおこない、子ども達のために日曜学校を開いていた。この奉仕活動に参加した学生たちの中には、命を狙われていた朝鮮人留学生たちも含まれていた。明治学院の震災ボランティアの源流はここにあったのだ。

関東大震災の40年後の1963年に開校した明治学院東村山高校は、賀川豊彦の影響を強く受けた武藤富男院長が、自ら初代校長になって設立した学校である。武藤は賀川の実践を東村山の教育の核心に据え、「キリスト教による人格教育を基調とし、道徳人・実力人・世界人を作ることを目的とする」という教育方針を提示した。「力なき者の弱さを担うべし、善を行って隣人を喜ばすべし」というキリスト教倫理を実践する「道徳人」を養成するために、様々な奉仕活動にも取り組んできた。

1995 年の阪神・淡路大震災では、東村山の中高生徒会は駅前などで募金を呼びかけ、300 万円もの義援金を集めたという。また、春休みを利用して自ら神戸にボランティアに行った生徒たちもいた。明治学院大学の学生たちも多数、神戸の賀川記念館でのボランティアに参加したが、その中には東村山高校の卒業生たちも含まれている。

東日本大震災では、明治学院東村山高校有志ボランティア・チームが結成され、2011年5月の第1陣から現在まで計10回、のべ97名の生徒と19名の教職員、26名のリーダーが被災地で泥だしやガレキ撤去、家財道具の整理、避難所での炊き出しや仮設住宅での子ども会、地域のお祭りや復興イベントの手伝いなどをおこなってきた。明治学院中学校でも、石巻に単一乾電池とLEDランタンを送るプロジェクトや無洗米を送るプロジェクト、南三陸町の子ども達にスーパーボールを届けるプロジェクト、仙台七夕祭りで折り鶴の吹き流しを飾る平和七夕などに参加。「高校生になったらボランティア・チームに入って被災地で活動したい」と考えている中学生も少なくない。明治学院が築き上げてきたボランティアのバトンは、後輩たちへと確実に引き継がれている。

さとう・たかふみ（協力研究員）

危機の時代の前触れのなかで

島田由紀

米大統領選挙は大接戦ののち、オバマ再選に落ち着いた。中国で政権交代があり、韓国では選挙が控えている。日本においても都知事選挙や総選挙が近く行なわれる。日本では、世界的経済危機に加え長年の構造的な社会の停滞のために、未来にビジョンを持つことが難しい状況が続いている。その中で一部の政治家は、諸外国と何十年も積み重ねてきた歴史を軽視し人々の感情を煽りたてて注目を集めている。中には「大日本帝国憲法の復活」を掲げる政治家グループさえあり、来る選挙でキーとなるであろう政治家たちが影響力拡大の私欲からこうしたグループにすり寄っている。経済不況や社会の停滞以上の暗い影が政治に影を落としているように思えてならない。

ドイツ人牧師ディートリッヒ・ボンヘッファー（1906-1945）は、二十代後半から三十代をヒトラー支配下のドイツに生きた。初めは告白教会を足場にナチス政権による支配に対抗したが、のちには軍の反ナチス地下活動に深く関与していった。1943年春に逮捕、やがてヒトラー暗殺計画への関与が露見して、ドイツ降伏の直前に39歳で政治犯として処刑された。

彼は1933年1月30日のヒトラー政権誕生のまさにその日から、政権に内在する問題に明確な社会的・倫理的・神学的自覚をもって対峙していた。2月1日、ボンヘッファーはベルリンのラジオ放送で講演した。若者の間で偶像化される指導者を厳しく批判する内容で、ヒトラーを指していることは明らかであり、放送は途中で打ち切られるほどであった。

ボンヘッファーは、一直線にナチスとの徹底的な対峙に身を投じていったわけではない。ドイツ教会へのナチスの介入が強まる中、33年秋から1年間ロンドンの教会に赴任してドイツから距離を置いたし、39年夏には開戦直前のドイツを離れアメリカに向かう（結局は、ドイツの人々と苦難を共にする決意を表明して1カ月で帰国するのであるが）。また、彼のナチス人種政策への危機感は当初はユダヤ系キリスト者だけに限られており、ユダヤ人迫害そのものに目を向けるようになるのは数年後である。

のちに多くの紆余曲折を経るのであるが、それでもボンヘッファーが、多くのドイツ人がヒトラーと政権の本質を見誤っていた（ヒトラーの政権奪取は共産党勢力拡張を恐れた各党の連立の思惑により可能となったが、2カ月後には全権委任法による独裁が成立し大量逮捕が始まった）ときに、当初から政権の問題に真正面から向き合ったことは、彼がのちに辿った道に至る最初の大きな分岐点であった。なぜこのような鋭い対峙が可能であったのか。

第一に、大衆の狂騒をよそに批判的に社会情勢を観察し率直に意見を交わしあう家庭の雰囲気があった。実際にボンヘッファーは義兄を通じて反ナチス運動に連なり、抵抗運動により一族から4人が逮捕・処刑された。第二に、若い時代から国外経験を積みＷＣＣに深く関わることで、内向きの民族主義的言説を批判的に見る感覚が養われていた。

第三には、若いボンヘッファーの神学的思索の帰結がある。33年の時点で27歳にして彼はすでに2つの博士論文といくつかの論考を発表していた。この時期に彼は教会共同体について考察するのであるが、共同体を可能にする前提として、他者への責任において自己を理解する個人というテーマを繰り返

し論じている。その議論はラジオ講演の中にも表われ、ヒトラーの大衆扇動を批判する重要な基盤となっている。33年1月という20世紀ドイツの転換のとき、若きボンヘッファーは自身のそれまでの思索の積み重ねに、思考と行動において正直であろうとしたのであった。

ヒトラーは10年以上前から過激な反ユダヤ主義を表明していたが、多くのドイツ人が、見たくないことに目をつぶり聞きたくないことに耳を塞いでいた。ユダヤ系住民のドイツ社会からの排斥・攻撃が行なわれるようになると、ますます人々は目と耳を閉じ良心を押し殺していった。

ボンヘッファーは始まりのときに、目と耳をはっきりと開きまっすぐに社会と己を見た。その後曲折があったとしても、最初にこの決断があったからこそ、その後の決断も可能であったのではないだろうか。最初に決断を放棄すれば、あとで決断することはますます難しくなる。

震災があり原発事故があり、経済の不透明さがあり構造的停滞がある。このようなとき、強い言葉を発する政治家は魅力的である。だが、若き日のボンヘッファーの言葉と行動は、自分を取り巻く社会と自分自身の真実から目を逸らすことなく向き合うよう、迫ってくるのである。

しまだ・ゆき（協力研究員）

雑録

下田好行

北川一明学院牧師のエッセーを読んだ。おもしろかった。牧師という職業も実にたいへんなものだということが分かった。礼拝にくる人たちに「聞かせる説教」をしなければならない。そのための研鑽を日々行っているというのだ。しかも、般若の面で。自分の実存をかけて同労者を批判する。実は大学教師も同じなのだ。研究においても、会議においても。自分の実存をかけて同労者を批判する。自己を追求すること、それはすばらしいことである。しかし、周りを見られなくなってしまってはちょっと品がない。何のための研究か、会議か。自分を満足させるためのものか。それをにおわせる人は自然とわかるものである。本質を持った人とそうでない人はやはり違う。

佐藤飛文協力研究員は明治学院のボランティア精神について書いてくれた。東日本大震災で明治学院東村山高校の生徒さんの活動を知った。現在まで10回、のべ97名の生徒と19名の教職員、26名のリーダーがガレキの撤去や家財道具の整理、避難所での炊き出し、復興イベントに手伝ってきたというのだ。明治学院が築き上げてきたボランティア精神は今も流れていると佐藤協力研究員は言う。なんとそのルーツは賀川豊彦にあるというのだ。賀川豊彦も関東大震災の時、明治学院の学生たちと炊き出しや物資配布を行ったのだという。精神は時代を超えて伝わるものだと思った。

島田由紀協力研究員は、ドイツ人牧師、ディートリッヒ・ボンヘッファーについて書いてくれた。彼は告白協会を足場に反ナチス地下組織に深く関わり、39歳で政治犯として

処刑されたのだ。島田研究員はボンヘッファーがヒトラーに本質がなかったことをはじめから直観しており、それがあったからこそ、最後までその信念を貫き通せたのだと語ってくれた。一般民衆はヒトラーの怖さの前に、眼をつぶり、耳をふさぎ、良心をおし殺して生きてきた。それなのに彼はヒトラーに対峙した。この彼の勇気はどこから来るのか。いったい彼の中にどんな確信があったのか。私は知りたいと思った。

明治学院大学名誉教授、キリスト教研究所名誉所員、成瀬武史先生が、11月20日に天に召されました。先生は研究にご熱心で、紀要によく投稿してくださいました。懇親会にもよく来てくださり、私たちを教え、励ましてくださいました。感謝申し上げます。先生が主と共に永遠にありますように、ご家族に主の慰めがございますように、ここにお祈りいたします。

もうすぐクリスマス。私たちは主が来られたことを賛美いたします。主の恵みと平安が私たち一同とともにありますように。

しもだ・よしゆき（主任）

研究所活動（2012年8月-12月）

・宣教師研究プロジェクト公開研究会
開催日時：2012年9月22日（土）13：30-
開催場所：白金校舎キリスト教研究所
《「東アジアキリスト教史研究の現状」シリーズII》
研究発表：「韓国における民族とキリスト教：〈民族教会〉再考」
発表者：松谷基和（早稲田大学留学センター講師）
コメンテーター：徐正敏（明治学院大学教養教育センター客員教授、明治学院大学キリスト教研究所協力研究員）

・150周年記念出版プロジェクト公開研究会
第4回
開催日時：2012年9月26日（水）16：00-
開催場所：白金校舎キリスト教研究所
発表題：「夜の復権――ヨーロッパ美術における月の諸相」
発表者：齊藤栄一（明治学院大学文学部教授、明治学院大学キリスト教研究所所員）
第5回
開催日時：2012年10月24日（水）15：30-
開催場所：白金校舎キリスト教研究所
発表題：「「万人救済説－内村鑑三と新井奥邃をめぐって－」」
発表者：播本秀史（明治学院大学文学部教授、明治学院大学キリスト教研究所所員）
第6回
開催日時：2012年11月28日（水）16：00-
開催場所：白金校舎キリスト教研究所
発表題：「人間における霊性の進化とキリスト教の秘儀―ルドルフ・シュタイナーの人智学をてがかりとして―」
発表者：下田好行（明治学院大学心理学部教授、明治学院大学キリスト教研究所主任）

・ＳＣＡ歴史編纂プロジェクト公開研究会
開催日時：2012 年 10 月 25 日（木）13：30-
開催場所：白金校舎キリスト教研究所
発表題：「日本社会におけるキリスト教の福音宣教と宣教師のあり方を再検討―主に第二次世界大戦後の展開と衰退―」
発表者：ジョージ・ギッシュ先生（青山学院大学名誉教授）

・キリスト教文化研究プロジェクト公開研究会
開催日時：2012 年 11 月 24 日（土）13：30-
開催場所：白金校舎キリスト教研究所
テーマ：キリスト教と文学
発表①　13：30-14：30
（質疑応答 14：30-15：00）
発表題：「高橋和巳「邪宗門」について　―「日常への回帰・椎名麟三」等を通して高橋和巳の宗教観を考察―」
発表者：丸山義王（明治学院大学キリスト教研究所協力研究員）
発表②　15：00-16：00
（質疑応答 16：00-16：30）
発表題：「椎名麟三の文学と希望―3.11 以後を生きるために―」
発表者：小林孝吉（文芸評論家・明治学院大学キリスト教研究所協力研究員）

・第 33 回賀川豊彦記念講演会
開催日時:2012 年 11 月 17 日(土)15:00-17:00
開催場所：白金校舎 2 号館 2101 教室
講演題:「反貧困とこれからの社会の在り方」
講師:湯浅誠(反貧困ネットワーク事務局長)
主催：賀川豊彦記念講座委員会、賀川豊彦学会
協力：賀川豊彦記念松沢資料館、明治学院大学キリスト教研究所

・2012 年度明治学院大学ヘボン塾校友講座
開催期間：2012 年 10 月 6 日（土）-11 月 24 日（土）3 限（13：05-14：35）
開催場所：白金校舎 2101 教室
※10/24 閉講式（場所：白金校舎 10 階大会議場）
第 1 回ヘボン（大西晴樹先生）
第 2 回アメリカ長老教会と日本伝道のはじまり（中島耕二先生）
第 3 回 S. R. ブラウン研究（岡部一興先生）
第 4 回フルベッキ研究（岡部一興先生）
第 5 回：武士的倫理的キリスト教徒・井深梶之助（新田孝二先生）
テキスト編集代表：橋本茂先生
フィールド・ワーク（参加自由型・同日 2 班実施）
実施日：2012 年 10 月 27 日（土）
・青山霊園墓参コース　担当：中島耕二先生
・横浜外国人墓地墓参コース　担当：岡部一興先生

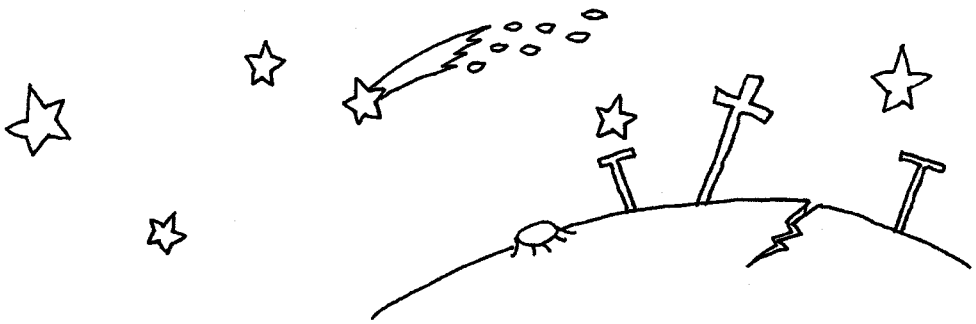
・明治学院研究担当者打ち合わせ
開催日時：2012 年 11 月 22 日（木）14：30
開催場所：白金校舎キリスト教研究所

新着図書（2012 年 8 月-12 月）

・『韓国キリスト教史概論　その出会いと葛藤　アジアキリスト教史叢書 1』徐正敏著、合同会社かんよう出版、2012。（徐正敏協力研究員寄贈）
・『生命倫理学と現代』岡部一興著、有限会社港の人、2012。（岡部一興協力研究員寄贈）
・『S. S. トゥール　現代聖書注解　歴代誌

上・下』津田一夫訳、日本キリスト教団出版局、2012。
・『キリスト教学校教育同盟百年史』キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編、キリスト教学校教育同盟、2012。（大西晴樹名誉所員寄贈）
・『キリスト教学校教育同盟百年史　資料編』キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編、キリスト教学校教育同盟、2012。（大西晴樹名誉所員寄贈）

・『福音と世界』No. 7、新教出版、2012。
・『福音と世界』No. 8、新教出版、2012。
・『福音と世界』No. 9、新教出版、2012。
・『福音と世界』No. 10、新教出版、2012。
・『福音と世界』No. 11、新教出版、2012。
・『福音と世界』No. 12、新教出版、2012。



イラスト・北川一明（学院牧師、協力研究員）

あんげろす　ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす　第59号

2012年12月5日　発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210／FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷　浩